

虹の繭

大庭みな子



虹の繭

江苏工业学院图书馆
藏 庭みな子 章

自選短篇集



大庭みな子（おおば みなこ）
 一九三〇年、東京・渋谷に生まれる。五三年、
 津田塾大学英語科卒業。六八年に「三匹の蟹」
 により群像新人賞、芥川賞受賞、大型作家の
 出現と評判になる。七五年、『がらくた博物館』
 で女流文学賞、八二年、『寂兮寥兮』で谷崎潤
 一郎賞、八六年、『啼く鳥の』で野間文芸賞を
 受賞。八七年、河野多恵子と共に女性で初め
 ての芥川賞選考委員となる。『海にゆらく糸』
 で第十六回川端康成文学賞受賞。『女・男・い
 のち』『鏡の中の顔』などエッセイ集も多数。

虹の蘭

—大庭みな子自選短篇集—

一九九〇年五月二十日 初版発行

著 者 大庭みな子

発行者 和田員枝

装 幀 中島かほる

印刷・製本 東洋印刷株式会社

発行所 株式会社 學藝書林

東京都中央区八丁堀二―三―五

電話 (〇三) 五五二―五九〇六 (代)

振替口座 (東京) 三―一〇八二一

定価はカバー・帯に表示してあります。
 乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に
 御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

虹の繭

大庭みな子自選短篇集・目次

林
5

幽霊達の復活祭
23

青い狐
61

釣りともだち
77

蛾
83

オーロラと猫
95

からす瓜
111

淡交
123

あとがき

298

恐竜

295

飛ぶ花

271

佐渡

257

どんぐり

221

帽子

195

虹の繭

171

いさかい

149

装
画

奥
山
民
枝

林

林

自分の髪のしなやかさに

最初に気づいた或る朝、

あさみどりの林が果しなく続いていた。

梢のふるえるのが神秘的なほど木は高く、

芽の伸びる妖しい音があたりにみち、

少女の細い腕のような枝々の間を

焦立ちを知らない時間が縫い、

初めて太陽にふれた幼児の頬のような

光が枝の上で睡っていた。

自分の髪のしなやかさに

戸惑いはしたが、

それを櫛けずる指はまだ不器用で、

それを束ねるてのひらは固く、

それをかき抱く腕は細すぎた。

波打つ髪は芽のかおりをつつみ、

乳房にまつわる風の中から

虹の泡が生れる。

わたしは風に無関心をよそおい、

風はしつこい媚びを繰りかえし、

わたしを暖かな土の上に横たえる。

大砲が火を噴いていたときも、

爐の中でひとの肉が焼けていたときも、

ひとの血を飲みすぎた草の葉が

ふりそそぐ雨にも赤い莖を洗えなかったときも、
ひとを殺す黒い機械のまわりに

蟻のように人間が群がっていたときも、

わたしは林の中で朝風の音しか聞かなかった。

噴きあげる泉の水で筆を洗い、

あけがたの空のパレットは

いつもまあたらしく、

一日のあらゆる時刻の色合いから

わたしは無限にチューブを製造した。

ふんだんに使いすぎる絵具は

よどみ始める。

わたしは麦畠に寝ころび

うずらと雲雀の逃げまどう足音をききながら、

飢えた鴉の群よりも飽きずに襲ってくる

飛行機がおとす無数の爆弾を眺めていた。

海辺の街も、川のほとりの街も、

野原の街も、山の上の街も、

華やかに赤い火を噴き、

人間はあみの上で手足を突っぱらせて、

じゅうと音を立てる魚のように火ぶくれした。

母親は黒く焦げた赤子を背負い、

もえさかる炎の髪をふり立てて走る女に

男は瓦礫に足を挟まれて

手をさしのべて息絶えた。

墓掘人夫さえ見当らず、

夫は妻のみひらいた眼の上に

土をかけた。

岩の間には

冷たい水が流れていて、

わたしは予期しない陣痛に

からだを折り、太陽を仰ぎ、

脳と耳と眼の無い児を生み、

流れの上に横たえる。

それは白い醜い魚のように

流れ去った。

風はそよいでいた。

林は果もなく続いていた。

下草は少年の髪のやわらかさでそよぎ、

梢は凝^みはった睫の慄え。

空の蒼さにわたしは泪ぐみ、

麦の穂に唇を刺す。

熟した桜の実で爪を赤く染め、

暗い森の中で眼をみひらき、

星に手をかざして、

指の間に夜の七色を見分ける。

やがて、

光の中をきれぎれの追憶が走り、

きれぎれの慰めがうずくまり、

痙攣がからだのふしぶしを走り、

得体の知れない疼痛が

脳髓と心臓の間を気ぜわしく往き来する。

理由もなく肉親を葬い、

理由もなく飢え、

理由もなく罰せられたので、
理由もない獣の叫びが
わたしの咽喉を窒息させ、
近づく者に石をふりあげる。
わたしは牙をむいた怪物の
腔の中でうずくまり、
林の外の様子を窺った。

そこにはとげとげしい眼つきの
いかめしい聖像が

優美にしなわせた二本の指に
不思議な道德の玉を持って、

囚人に毒入りのスウプを配る看守のように
微笑を浮かべていた。

輝く玉を捧げ持った

聖像のまわりを

風が哭き、

星が泪ぐみ、

水がつぶやき、

わたしは素足で膝をついて

這いまわった。

聖像の肌にふき出た緑青は猛毒で

押しつけたわたしの唇は感覚を失い、

わたしは聖像のふくら脛の内側に

虎の眼のように燃える自分の眼を映す。

わたしの中には

世界に対する愛と憎しみが弾き合い、

不意に世界に自分を賭けることを決心する。

身のほど知らずな

あふれすぎる慾望を、

發育不全の子宮の中で、

栄養不良の不具の赤ん坊を育てる。

赤ん坊が死んだのは

林が嵐につつまれて、

森中の木が

怒った魔王の髪のように

逆立った夜のことだった。

長い反省の

冬ごもりの間、

わたしは

うつら うつらと、